

## 『マルテの手記』における想起空間について

熊 沢 秀 哉

### Zum Erinnerungsraum in Rilkes ›Malte Laurids Brigge‹

Hideya Kumazawa

#### 1.

『マルテの手記』について考えていこうとする時、小説の形式論としては、まず最初に次のような問いに突き当たらざるを得ない。すなわち『マルテの手記』の個々の手記に、ある程度のまとまりを見るのか、それともそれぞれ個別のものとして捉え、他の手記との構成上の関連性を問題として取り上げないのか、ということだ。『手記』を幾つかの部分に分けて考察しようとする前者の立場を取った場合、各々の部分がどのように関連しているのか、あるいは小説全体の枠組みの中でどのような流れを形成しているのか、と言う問いを避けて通ることはできない。Goethe の›Wilhelm Meister‹に代表される「教養小説」が「小説」の1ジャンルとして確立しているドイツでは、ある小説、特に第二次大戦以前に書かれた小説の構成を見る場合には、それが「教養小説」の範疇に入るのか否かが大きな問題となって来る。『マルテの手記』研究においてもそれは例外ではない<sup>(1)</sup>。つまり『マルテの手記』に、あるいは手記の書き手としてのマルテに、発展的な展開が見られるのかどうかということなのだ。前稿<sup>(2)</sup>で論じたように、リルケは、マルテを客観的に物語る、すなわち物語の主人公とする視点を意識的に放棄している。また21までの手記には見ることのできる「語り」の視点の残照も、22以降の手記においてはほぼ完全に姿を消している。そのため『マルテの手記』を一読すれば、マルテに発展的な成長の後を追うのは無論のこと、通常の意味における登場人物としてのマルテの姿を捉えることさえも困難であることが分かる。では『マルテの手記』に、幾つかのまとまりを成す部分は見られないのだろうか。否、少なくとも前稿で取り上げた21までの手記とそれ以降の手記のあいだには明らかな区切れが見られる<sup>(3)</sup>。また22以降の手記も大きく二つに分けて考えることが出来るだろう。『マルテの手記』を幾つかの部分に分けることと、それらの部分の間に発展的な展開を見いだすかどうかということは本来別の問題である筈だ。本稿では『マルテの手記』を三つに分ける立場を取り、その中の二つ目の部分、具体的には22から44までの手記を考察の対象とする。『手記』を三つに分けて考え

る視点は『マルテ』研究においては一般的なもの<sup>(4)</sup>だが、その際に問題となるのは、二つ目と三つ目の境をどこに取るか、ということになるろう<sup>(5)</sup>。なぜなら、上述した21までの手記とそれ以降の手記の場合のように、二つ目と三つ目の間には明らかな切断面が見られるわけではなく、読み方によっては区切れが意識され得ないことも考えられるからだ。ここで晩年のリルケが W.v. Hulewicz に宛てた手紙を引用してみよう。「時代遅れの劇作家が、我々の内部に沈んで見えないものとなった出来事の、目に見える証拠を捜し回る、そのように、若いマルテもまた、見えないものの領域へと消え去りつつある生を、現象や形象によって目に見える形にすることを求めたのです。彼はそれらのものを、ある時は自らの子供時代の思い出に、またある時はパリの現実に、ある時は読んだものの思い出のなかに見出しました。そしてそれは、経験されたかもしれないことも全て含まれていました。彼にとってはすべて等しく重要であり、永遠の価値をもつ現在なのです。」<sup>(6)</sup>。ここで述べられている「パリの現実」、「子供時代の思い出」、「読んだものの思い出」がそれぞれ『手記』の1、2、3番目の部分に当たると考えられる。二つ目と三つ目の部分の境が明確ではないのは、どちらも「思い出」という点では同じものであるからだ。研究によっては、45から48までのマルテの父の死をめぐる手記を、二つ目の部分に入れているものもある<sup>(7)</sup>。しかし本稿では、マルテの父の死がマルテの子供時代の出来事ではないこと、さらに父の遺品である財布から見つかったクリスチアン4世の臨終の様子を書き写した紙片の思い出が、「読んだものの思い出」の一種の先取りと考えられることの二つの理由から、これらの手記を三つ目の部分に属するものとして、本稿の対象とはしないこととする。また今まで使用してきた『マルテの手記』の一つ目、二つ目、三つ目の部分という言い方を、便宜上以後1部、2部、3部という言い方に換えていきたい。

引用した手紙の中でリルケ自身が述べているように「子供時代の思い出」として取り敢えずまとめることのできる22から44までの手記に、前稿で扱った「書くこと」の問題をそのままの形で当てはめることは難しい。1部の手記では「パリの現実」に直面するマルテの姿、さらに手記に向かうマルテの姿、という対現実、対手記の構図が保たれていた。しかしこの2部では、自らの「子供時代」を想起しているマルテ、及びそれを手記にするマルテの姿は見られないのだ。1部において「子供時代の思い出」を取り上げている手記15の冒頭部は次のようなものである。「その当時、僕は12才かせいぜい13才だったにちがいない。僕は父に連れられてウルネクロスターに来ていた。」(6-729)<sup>(8)</sup>。これに対し、2部で実際に「子供時代の思い出」が始まる手記27の冒頭部では、「誰も女について話すことができない」(6-785)という「語り」の不可能性の問題について触れられ、次に「僕が女の姿をありありと思い浮かべることができたのは、僕に繰り返しせがまれて、ママンが話をしてくれた時だけだったー」(6-786)とやや唐突に「ママン」の思い出に移行していく。想起を対象にしている点では同じでありながら、1部では現在パリにいるマルテから見た時間と場所の指示がな

されているのに対し、2部の手記27からは、想起されている子供時代のマルテの年齢も場所も知ることができない。一例を挙げたに過ぎないが、この状況は2部全体を通じて変わることはなく、こうした中で手記の細部から、パリに居て手記を書いている仮定のマルテを再構成し、その「書き方」を問うことは無意味であろう。以上の理由から本稿ではまず「子供時代の思い出」とはどのような角度から捉えるべき問題なのかを論じ、さらに手記の内容を分析しながら最後に「語り」と「書くこと」に対していくらかでも新しい照明を当てていきたい。

家族を含めて、旧来の人間関係を捨てた、孤独な者の内部から湧き上がる不安について手記23では以下のように描かれている。「踏み潰された甲虫のように、お前はお前の中から飛び出してしまふ。お前の表面の少しばかりの堅さや弾力など何の役にも立たない。」(6-777) 1部で「書かれ」たマルテの自我の崩壊を受ける見事な直喩だが、2部の主題はこの崩壊過程を描く所にはない。問題なのは上記引用部の直後に来る一節なのだ。「ああ母よ、かつて幼い頃に、この深い静けさを遮ってくれた唯一のひとよ。この静けさを身に受け隠し、あなたはこう言われた一怖がらなくていいのよ、私はここよーと。恐れおののき、たおれんばかりのもののために、一晩中でもこの静けさになりきって下さる母よ。」(6-777, 778) 孤独の不安から幼い頃の母の思い出へ、というこの流れを見るとリルケの言う「子供時代の思い出」とは結局のところ現実逃避の「幼児退行」ではないかと指摘されても仕方がないように思われるかもしれない<sup>(9)</sup>。この指摘に答えるためには、マルテの志向がどの方向を取っているかを確認しなければならない。すなわち、マルテは、恐ろしい現実から「思い出」の中に逃避するつもりなのか、それとも何か別の意志を持っているのか、ということである。2部の冒頭に置かれている22, 24, 26の三つの手記では、主に三人の芸術家、ボードレー、ベートーヴェン、イプセンについて書かれている。特に24ではベートーヴェンが無条件に称賛され、次のように述べられる。「世界を完成するものよ。大地や河にあてどなく降った雨が、姿を消しながら永遠の法則に喜んで従い、あらゆるものから再び現れ、立ちのぼり、漂い、天を形造る。そのようにお前の内部から我々の悲惨が立ちのぼり、世界を音楽でおおうのだ。」(6-779) マルテは、自分も含めた、打ちのめされた人間の「悲惨さ」を美化しようとしているわけでも、他の何物かに転化しようとしているわけでもない。現実社会における人間の「悲惨さ」は芸術による「世界の完成」に寄与するとマルテは言う。しかしそれだからといって人間の「悲惨さ」から生まれる苦しみ自体が解消するわけではない。この分りにくい問題についてここでこれ以上具体例を挙げて記述することは、論の展開を混乱させる原因となるため避けておきたい。しかし今確認しておきたい点は、マルテの志向が常に「芸術」に向いている、ということだ。『マルテの手記』完成直後に書かれた手紙の中でリルケは次のように述べている。「今や本当にすべてのことを正しく始めることができるのです。あわれなマルテは深い悲惨の中で始めなければなりませんでしたが、彼は永遠の至福に到達したの

です。彼はすべての音階を捉える心です。彼の後、今やほとんどすべての歌が可能となったのです。」<sup>(10)</sup>。1部の悲惨な「パリの現実」も2部の「子供時代の思い出」、3部の「読んだものの思い出」も、皆等しく「芸術」のための空間をひらくものとして捉えられなければならない。「子供時代の思い出」を、悲惨な現実からの逃避、あるいは「幼児退行」などという似非心理分析的な切り口で解釈しては、『マルテの手記』を「読んだ」ことがあるとさえ言えないだろう。

以上、リルケの言う「子供時代の思い出」の基礎的な方向を確認した。次章では具体的な想起の始まる27から44までの手記を取り上げ、「子供時代」、「想像」、「愛」そして「語り」の諸テーマに分けて分析していきたい。

## 2.

### 2. 1. [子供時代、あるいは子供という存在]

手記において想起される「子供時代」には、いかなる特性が見られるのだろうか。子供の頃に経験した出来事のすべてが、想起されるべき条件を満たしているわけではない。30、31の手記では、病気に臥せった思い出が描かれ次のような一節が登場する。「熱が僕を掘り返し、僕の知らない経験や形象、出来事などを僕のずっと奥のほうからひきずり出してしまった。」(6-797) この後、子供のマルテは恐怖から叫びだし、母が駆けつけてくれるのだが、この点は異なるとはいえ、基本的な状況は、1部で描かれた、パリの下宿で一人臥せるマルテと同一のものである。既に成人しているパリのマルテは、前稿で見たように、あらゆる人間関係を断ち、自らの自我を揺さぶり続けた果てにこのような状態に陥った。それに対し、子供のマルテは単に熱を出してしまうだけで同様の経験を遂げてしまう。手記31では「病気の午後」が次のように想起される。「しかしこのような、病気で寝ている午後がどれ程長かったことか。……いつまでも午後のままであって、午後であることが終わらなかった。」(6-798) ここでは、熱を出した子供が、通常の時間の支配する「日常」から抜け落ちてしまっていることが問題になっているのだ。ふとしたことがきっかけとなって、別の時空に抜け出してしまおう子供という存在、この存在性が芸術のための空間につながるものでなければ、マルテにとって意味のあるものとはなり得ないことは上述した通りである。

『マルテの手記』においては、「子供の存在性」に限らず、対日常性ということが一つの底流を成している。「パリの現実」におけるマルテも、最後の手記の「放蕩息子」も日常から逃げ出そうとし、またそれに半ば成功した、ある意味では痛ましい「存在」と言える。もはや「子供」ではない両者の場合、「日常」から「抜け出る」ためには日常生活を捨てなければならない、しかもその状況を意識的に持続しなければならない。しかし「子供」は、大人によって作り出された「日常」に完全に組み込まれた存在ではなく、日常生活に接しながら

それとは異質な部分を多分に残している。それ故、子供という存在との対比の形で、大人の「日常」の性格が、より明確な姿を取って現れるのである。手記32の冒頭部では、大人の「日常」について、「誰もが、よく知っているものの中にいるという感情に支えられたいと願い、理解できるものの中で、慎重にうまくやって行こうとする世界」(6-801)だと言われている。つまり大人たちによって作られた日常の世界というものは、大海に浮かぶ小島のようなものであって、その外には未知の現実世界が果てしなく広がっている、と言われているのだ。さらに大人は、この限られた日常世界における自分たちの位置さえ認識しようとはしていない。周囲で起きている事象を自分の目で「見る」こともなく、ただ「よく知っているものの中にいるという感情」を共有しているに過ぎないのである。このような世界では、人の感情さえも飼い馴らされてしまう。「悲しいと決められてしまったこと、嬉しいと決められてしまったことがあって、その他のものはどうでもいいとされてしまう。」(6-801) 漠とした不安や恐れ、対象の曖昧な怒りの感情は日常を越えた何物かに通じる可能性を秘めており、それ故禁忌とされるのである。「あらゆるものは申し合わされた枠内」(6-801)に収まらなければならないのだ。なぜ大人たちは、このような虚構とも言える「日常世界」の中で「慎重に、うまくやって」行かなければならないのだろうか。マルテは彼らを俗物だと見なしているわけではない。またマルテ・リルケは俗世間軽蔑主義者でもない。マルテが1部において身をもって示したように、「日常世界」を離れるということは、「自分」を失うということなのだ。いわゆる自己同一性というものは、「日常世界」においてしか保たれ得ないことをマルテは知っている。さらに、自分を見失っては生きて行けないことは、マルテには重々分かっている。「日常」にしがみつく大人たちは、それ故、決して軽蔑されるべき存在ではないのだ。誰もが自己同一性を失ってしまったとしたら、そこはもう人間の住む世界ではないのだから。では逆に問うてみよう。なぜマルテは「日常生活」を捨てなければならないのだろうか。自己同一性崩壊の危険を冒してまで。それは「日常世界」においては、もはや芸術の成立する余地がないからだ。飼い馴らされた「悲しみ」や「嬉しさ」の感情から「歌」は生じてこないからなのである。マルテ・リルケにとって芸術とは「外の世界」につながる何かを持っていなければならない。それ故にマルテにとっては、「日常」を「抜け出る」ことが常に問題となってくるのである。繰り返しになるが、「子供」は「大人」の世界に半身を入れただけの存在であり、「しかし、いつものように一人で遊んでいる時に、この単純化された、全体としては害のない世界をふと踏み越えて、全く異なった、予測のつかない諸関係の世界に入ってしまうことがある。」(6-802) マルテにとってこの「諸関係の世界」こそが、手記24で触れられたベートーヴェンの音楽のような、真の芸術の生きる空間なのである。

子供は、大人になる前に死を迎えなければ、いつか子供ではなくなる時がくる。マルテはこれを子供から大人への成長という形ではなく、子供という「存在性」の喪失という形で捉える。2部も終わり近くの手記43では、この喪失経験の舞台として誕生日の思い出が描かれ

る。マルテは、誕生日そのものが非日常的な場を形成すると考えているわけではない。毎年繰り返される誕生日は、生活の一部であり、「生活とは、区別をしないということできり立っていることは、僕には既に分かっていた。」(6-842)しかしマルテは、子供というものは、誕生日には、朝「喜びの権利」(6-842)をもって目覚めると言う。そしてこの「権利の感情」はまだ幼い頃に形成されたものだとして次のように言う。「幼いものは、目にする全てのものに手を伸ばし、掴み、丁度手にしたものを、決して誤ることのない想像力によって、その時欲しいと思っていたものに変えてしまうのだ。」(6-842)幼年期においては、誰でも自分の周りにあるものを自分の世界に引き込む力を持っている。この幼年性を残している間は、子供にとって誕生日が非日常性の混じった空間になり得るのである。ところが、ある時突然子供らは、誕生日の準備をする不器用な大人たちの様子に気付く。彼らは、「お祝いのテーブルが用意されている間に何か落として壊したり」、「まだ開けてはいけないドアをうっかり開けて子供たちにプレゼントを見られて」(6-843)しまったりする。勿論この時に限って大人たちが特別不器用であったわけではない。変わったのは子供の方であり、彼らが自分の周囲にある大人の世界に気付いた、ということなのだ。手記ではこの後、「誕生日を救う」(6-843)のために、不器用な大人たちに協力する子供たちの姿が、いくらか皮肉な(ironisch)視点から描かれる。イロニーとは対象との距離なくしては成立しないものであり、マルテの、所謂「子供の世界」とは無縁の態度である。こうした視点の変化からもマルテが大人の世界に組み込まれていく過程を読み取ることができよう。手記43の最終段落では、大人の世界に入ってしまった子供から見た誕生日が「奇妙な」ものとなった、と繰り返し言われる。(6-844)「奇妙な」という単語は、原語では *-fremd-* であり、「疎外」を意味する *-Entfremdung-* につながる言葉である。これは、成人したマルテの疎外状況が、子供の存在性を喪失した瞬間から、言い換えれば、大人の日常生活に組み込まれた瞬間から、生じたものであることを暗示する言葉なのだ。

## 2. 2. [想像]

上述してきたように、マルテは子供の存在の特異性を、何らかのきっかけによって大人の世界の日常性から抜け出してしまう点に見ている。子供の持つ存在性が失われる瞬間を想起した手記43の上記引用部を見て行くと、子供と大人では周囲の事象に対する関係に根本的な差異があることが分かる。すなわち子供は、周囲の世界と「想像」を持って交わり、対して大人は「意識」を持って相対する、という点に。勿論、全くの幼児を除けば、子供も「意識」を持っている。逆に言えば、子供は、「熱」や「遊び」がきっかけとなって「意識」を捨てる時、「抜け出た」存在となるのだ。手記32の後半部には、マルテが「遊び」に熱中することで、「意識」から「想像」を持って世界に関わっていくことになる過程が描かれている。この部分の手記の全体的な特徴として挙げることは、まずその象徴性であろう。

マルテが「容易に見つけられない場所」(6-802)に入り込むこと、鍵のかかった衣装箆筒、鍵の発見、最後まで開かなかった箆筒が何かの拍子に開くこと、これらの事象はマルテが日常世界を「踏み越えて」、*「別の世界」*に入り込むことを象徴するものであると見ることができる。マルテは、普段は使われない客間のさらに隣にある隅室に入り込み、衣装箆筒の中に様々な礼服を発見する。それらの衣装の中には「それ自体で影響力を持つものもある」(6-804) ことにマルテは気付く。様々なポーズを取らなくても、服の袖に手を通すだけで「普段の手とはまったく違ってしまって、あたかも俳優のような動きをする。」(6-804) しかし、この段階ではマルテの自意識はまだ失われていない。「この変装は、僕が自分を見失う所にはまでは至らなかった。むしろ逆に、入念に変装すればする程、ますますはっきりと自分が自分であるということを意識した。」(6-804) この過信がマルテをより大胆にし、ある日それまで開かないものと思われていた最後の箆筒を開けてしまう。その中には仮装舞踏会用の衣装がしまわれている。ピエロの衣装やまがいものの宝石をちりばめた冠などはマルテの興味を引くものではない。既に役割を決められた仮装用の衣装や小道具ではマルテの欲求を満足させることが出来ないのだ。それに対し「ゆるやかなマント、肩掛け、ショール、ヴェール」(6-805) 等、布地のままであるものがマルテを陶醉させる。「それらのものの中に僕は真に自由に無限に働くものの可能性を見た。」(6-805) 布地を纏ったマルテは、「売られていく女奴隷にも、ジャンヌ・ダルクにも、老いた国王にも、魔法使いにもなれるのだ。」(6-805) つまりここで言われている「無限に働くもの」とはマルテの想像力に他ならない。自分を見失わない程度の想像力から、ここでマルテは「踏み越えて」しまうのである。さらにマルテは、外界に対する自意識の最後の絆である自分の顔を、仮装舞踏会用の仮面で覆う。この時マルテは、周囲の世界と意識でつながる状況から完全に「抜け出して」しまい、自分では保たれていると思っていた自意識も、彼が何かのはずみで部屋の円卓を倒してしまうことによって脆くも崩壊する。衣装を脱ごうとして鏡の前に走ったマルテは気付く。「どういった方法でか、鏡は僕に目を上げさせ、僕に、鏡に映った像を見させた。否、現実を、見たこともない恐ろしい現実を見させたのだ。僕はその現実にあっけなく飲み込まれてしまった。というのも、今や鏡が主人であり、僕が鏡であったからだ。」(6-808) マルテは、日常世界で自己を支えていた「意味」をすべて失い、鏡の像が現実となるような、反転した世界に「抜け出して」しまったのだ。

「想像」(原語では *Einbildung*) と「像」(同じく *Bild*) の問題についてもう少し詳しく見て行きたい。手記34では、母方の叔父クリスチアンについて想起される。彼は年中外国に旅行し、常に不在である。彼の生活についてはただ噂のみが伝えられ、その結果、「叔父の生活は、まさにどのようにも解釈可能なのだった。」(6-812) マルテはこの叔父に対して想像を逞しくする。「僕の想像力は、何週間も彼をめぐって働いた。僕たちの間にはある種のつながりがあるような気がした。僕は彼の本当の生活を知りたいと思った。」(6-813) ところ

が手記は、叔父クリスチアンについてこれ以上の展開を見せない。マルテは、その興味を一部に幽霊として登場したクリスティーネに移してしまう。今度のマルテは、「奇妙なことに彼女の生活について知りたいとは思わない。」。(6-813) そうではなくて、マルテはクリスティーネの肖像画を見たいと考えるのだ。クリスチアンとクリスティーネに対するマルテのこの反応の違いは、どのように解釈されるべきだろうか。クリスチアンに向けられるマルテの「想像力」は、彼の生活状況を知りたいという好奇心を動機にしている。この場合のマルテの「想像力」は、クリスチアンをめぐる世間の噂と同レベルのものでしかない。クリスチアンはクリスティーネと同じく不在ではあるが、生活を持つという点でなお日常世界に属する存在なのである。対して、クリスティーネの場合、既に生者ではないのだから、当然のことながら現在の生活圏に属するものではない。ブラーエ家の故人の肖像画は家の画廊に架けられているはずであり、マルテはそこにクリスティーネの肖像画を探しに行く。画廊でマルテはエーリク少年と会う。この少年は手記15でも見られたように、クリスティーネと親しい唯一の生者である。この時も、自分の姿を見たいというクリスティーネと共に肖像画を探している所だ、と彼は言う。ところが絵は見つからない。エーリクはさらにクリスティーネのために鏡を持って来るが、彼女の姿は鏡には映らない。彼は言う、「鏡に映るなら、ここに肖像画はないだろうし、肖像画があるなら鏡には映らないのさ。」。(6-817) すなわち、生者であれば、故人として画廊に肖像画が架けられることはなく、故人であれば、当然その姿が鏡に映ることはないとエーリクは言うのだ。では肖像画もなく、鏡にも映らないクリスティーネは、何物なのか。このような問いを立てるより、むしろ、死者でも生者でもないクリスティーネの存在する場のあることが、この手記で視覚的に暗示されている、と言った方が良いでしょう。手記32でマルテが「抜け出して」しまった反転した世界、言い換えれば「像」の世界にクリスティーネは存在するのである。またそれ故に、少年であるマルテの関心は叔父クリスチアンの場合と異なって、クリスティーネの「肖像画」、つまり「像」(原語ではどちらも“Bild”)に向けられる。マルテの真の「想像力」は叔父の「生活」に向けて働くべきものではなく、クリスティーネの「像」の世界に向けられるべきものなのだ。

手記42は、「想像」によって「像」の世界が開かれ、そこに日常の世界では不在であるものが現在することをよく示す例として挙げられるだろう。マルテの一家は火事で母屋を失ってしまったシューリン家に招待される。マルテ一家は、シューリン家に馬車で向かう途上、霧と雪のために普段とは別の道を通っているような錯覚に落ちる。「そうこうしている間に、また静かに雪が降り始めた。今度は、今まで見えていた最後のものまでが消され、何も書かれていない真っ白な紙の中を進んで行くようだった。」。(6-837) このような偶発的な状況の中で、マルテやマルテの母のみならず、マルテの父や御者といった人間までもが日常的な意識の世界から切り離されてしまう。一行は消失した母屋を目指して進むが、シューリンの家の者に声をかけられて我に帰る。マルテの父や御者にとってこの出来事は一瞬の気の迷いに



過ぎない。しかしマルテやママンにとって「その家は今日はある」(6-839) のであり、「もし僕とママンがここに住んでいれば、それはいつも在るだろうに。」。(6-840) この手記のマルテは、社交好きなシューリン家の団欒の場から何とか逃れて「今日はある」に違いない母屋を見に行こうとする。勿論、日常空間の場にこの母屋が現れるわけではない。この母屋が「在る」のはマルテとママンの「想像」によって開かれた「像」の空間の中であるからだ。子供のマルテは、日常性の支配するシューリン家の居間から、母屋の「在る」「像」の空間へと、無邪気に通り抜けようとする。この無邪気さこそがマルテの幼年性の証しでもあるのだが、シューリン家の居間で起きた出来事によって、ある変化が生じる。母屋の火事以来、火に対して過敏になっているシューリン夫人が、何かの焼ける臭いがすると行って、部屋中を「嗅いで」まわるのだ。マルテも緊張して感覚を澄ませる。「その時、生まれて初めて、僕は幽霊に対する恐怖のような感情に襲われた。」。(6-841) 五感の緊張と、「見えないもの」に対する恐怖と不安の感情は、パリのマルテを再三襲った症状と同一のものだ。「見えないもの」の世界に、「想像」ではなく「意識」を持って関わる時、「不安」と「恐怖」が生じる結果と成らざるを得ないことが、ここでも示されているのだ。さらに、マルテは、「あの家が、今再び消え去ってしまったこと」(6-842)を知る。この「像」の世界の消失は、マルテが、「想像」によって世界と交わる存在から「意識」の世界へ移行してしまったこと、つまり、彼の幼年性の喪失を示していると考えられるのである。

### 2. 3. [愛]

『マルテの手記』における「愛」の問題は、2部だけに限らず、1部、3部に見られる諸テーマの中でも最も捉え難いもの一つに数えられよう。「愛」のテーマは、2部、すなわち「子供時代の思い出」の部分において、マルテの母の妹であるアベローネを軸としながらかなりのスペースを持って展開されるものであるが、1部及び3部の手記とのつながりがはっきりとしないのである。『手記』における「語り」の問題を扱ったある研究<sup>(11)</sup>では、この「愛」の問題は全く無視されている。また『手記』に発展的な展開を見ようとする別の研究<sup>(12)</sup>では、「愛」をマルテの発展的展開の中心点であるとする力業すら登場する。しかし本稿では、「パリの現実」も「子供時代の思い出」も「読んだものの思い出」も、「展開」を成す線としてつながるものではなく、それぞれ並列的な関係にあり、芸術のための「空間」をつくるための試みとして捉える立場を取っている。それ故、「愛」を、無理に中心点として解釈しなくても済むのだが、そうでなくてもそれはやはり幅の広い問題であることには変わりはない。そこでここでは、出発点として、問題点の指摘と方向付けを試みて見たい<sup>(13)</sup>。

少年のマルテにとって、アベローネは当初極めて印象の薄い存在だった。「僕がアベローネの存在に初めて気付いたのは母の死んだ翌年であった。」。(6-824) その理由は、彼女が常に家に居てしかも何故居るのが分からないような女であったからだ、とマルテは言う。つ

まりアベローネは、社会的役割を全く果たしていない、ということだ。日常的能力は皆無であったと言われるマルテの母でさえも、主婦であり母であるという役割を持っている。対してアベローネは、完全に非社会的存在なのである。またマルテは、アベローネを「美しくない」女性だといつの間にか決め込み、そう信じつづけたと言う。おそらく大人たちから与えられたこの先入観は、男の目から見た女というものの価値基準が投影されている。女の美醜はそれだけで社会的な要素を含むものと言えよう。アベローネは、誰からもまともに相手にされないことで、かえってこのような判断を免れた、自由な存在であると言えるのだ。しかし、アベローネは何もできなかったわけではない。「彼女は歌うことができた。」(6-824)彼女の歌が、マルテの音楽に対する興味を開き、「アベローネが、やがてもう一つの天空を開いてくれることになるとは予想もしなかった。」(6-824)この「もう一つの天空」が「愛」なのである。ここで留意しなければならない点は、マルテにとって「愛」が「音楽」と同様のものとして現れていることだ。つまり、「愛」もまた「想像」と同じく芸術のための空間につながる力として考えなければならないのである。アベローネとマルテは、通常の意味での恋愛関係にあるわけではない。アベローネは、かつての恋人への愛を保ち続けており、何故結婚しなかったのか、というマルテの問いに対して、「誰もいなかったからよ」(6-825)と答える。マルテは、その瞬間に彼女を美しいと感じる。すなわちマルテは、「愛」の対象を失いながら「愛する」ことを止めないアベローネの「存在」に心を奪われているのだ。対象に遮られることがなくなって初めて「愛」は、日常空間を乗り越えて行く「力」と見なされるのである。

このように、アベローネは、リルケのいわゆる「愛の女性」の原型と見なすことができるのだが、上述したように、『マルテの手記』全体から見た時、「愛」のテーマが何故『手記』のこの位置にあるのかという問題は残されたままだ。この問題に答える糸口は、「愛」のテーマのみを追っていてもなかなか見えてこない。したがってここでは、「愛」を「死」のテーマとの関係において考えて見よう。前稿でも論じたように、「パリの現実」において「死」のテーマは非常に大きな比重を占めている。既に手記1の中で、マルテは、「人々は死ぬためにこの都市へやってくるように思える。」(6-709)と書いている。またその後も、「果実としての死」、祖父ブリッゲの死等の「死」を中心に据えた手記が続く。3部は、マルテの父の死で始まり、「読んだものの思い出」もほとんどが「死」にまつわるものばかりである。マルテにとって、否定的な日常の現実においては、芸術のための空間につながる通路は否定的な形を取ってのみ現れるのだ。その代表が「死」であり、それ故「死」は「果実としての死」という形象を与えられもした。『マルテの手記』2部の中でも人物の死が現れないわけではない。少年のマルテと最も重要なつながりを持つマルテの母の死が手記33に登場している。ところが、母の死について書かれるのは、僅か一段落の分量に過ぎず、それも実質的には「そうこうするうちにママンは死んだ」(6-811)という一文で済まされている。その直後

『マルテの手記』における想起空間について

の手記に描かれる祖母の死についても同様である。この状況はいかに解釈されるべきだろうか。「子供時代の思い出」という想起空間の中では、「死」のテーマが展開され得ないと考える以外、他に妥当な答えはないのではなかろうか。すなわち、想起空間は、「パリの現実」の反転した世界であり、そこでは「パリの現実」で有効であった「死」という回路が機能しないのである。反転した世界においては、肯定的なものが、肯定的な姿をとって現れる。それが「愛」なのだ。アベローネに代表される「愛」は、「パリの現実」における「死」の裏返しと考えることが可能なのである。

#### 2. 4. [語りと書くこと]

『マルテの手記』の2部には、「語り」について述べられている部分が何か所か見られる。手記27では、「その頃僕は、誰も女について語るができないことに初めて気付いた。」(6-785)と書かれ、手記37ではアベローネについて、「君のことについて語るのはもう止そうと思う。・・・語ることは、不正確なことしか伝わらないからだ」(6-826)と言われる。この二か所は、内容的には同じものであると言うことができよう。手記27では、上記引用部に続けて、「彼らが女のことを話す時は、彼女のことには触れずに、他の人の名前を挙げたり、場所やまわりの状況を説明し、いよいよ核心部までくるとそれも止してしまって、後には女を包む輪郭が、今まで一度もなぞられたことのない、ほのかな輪郭が残るのであった。」(6-785, 786) マルテの言う「女」とは、周囲の生活環境や他の人間との関係に、その全てを置き換えてしまうことのできない、上述してきた用語を用いれば、「日常世界」を抜け出した部分を持つ「存在」なのである。そうした「存在」である「女」に対して、対象を他のものに関係付けることを目的とする言葉を、たとえ万言費やしても無意味だとマルテは言っているのだ。2部の最後の手記44においても、冒頭部に次のような一節が置かれている。「本当の意味で語るということがあったのは、僕が生まれる前までのことであつたらしい。僕は、誰かが語るのを聞いたことがない。」(6-844)つまり『手記』においてマルテは、一貫して「語り」の不可能性を言っているのである。ではマルテの言う「本当の語り」とはいかなるものなのであろうか。

上記の手記44では、「本当の語り」を行った者として、マルテの祖父ブラーエ伯爵が登場する。マルテは「本当の語り」を経験したことがないと言われているのだから、ブラーエ伯の「語り」を経験したのは、マルテではなくアベローネだということになっている。マルテは、「彼女が知っていることを書き留めようと思う」(6-844)わけだが、このことが、単に話の整合性を保つための設定に過ぎないのか、それとも「語り」の経験者がアベローネであることに何らかの意味があるのかについては後に言及することになるであろう。アベローネが、父ブラーエ伯の「語り」に接したのは彼女がまだ少女の頃である。当時ブラーエ一家は、町の住居に暮らしており、ブラーエ伯も引退した身とはいえ自室に引きこもって生活してい

るわけではない。ところが、「ブラーエ伯は、彼の娘たちから離れて生活していた。」。(6-845) 彼は自分の娘たちに全く無関心なわけではない。他人から娘の話を書くことは好むのである。「彼は、他の誰かと生活を共にするなどということは空想に過ぎないと考えていた。」。(6-845) これらのことから、ブラーエ伯についてどのような人物像が浮かび上がるであろうか。ブラーエ伯は、非社会的で孤独を好むような類いの人間ではない。家族と共に住み、かつ客が毎日のように訪れる環境にしながら、それらを拒むことなく、しかもそれらに影響されることなく自分の生活を生きることが可能な人間、それがブラーエ伯なのである。マルテは、新しい生を始めるためには既存の人間関係を全て捨て去らなければならなかった。ブラーエ伯にはその必要はない。彼は、マルテ等より存在的にはるかに強い人間なのである。そのブラーエ伯が、回想録の口述筆記役としてアベローネを選んだ時も、自分の娘だからというような情緒的な理由は一切見られない。早朝に書き物をするという「同じ習慣」(6-845)を持つということが理由の全てなのである。ブラーエ伯の回想録の内容も、伯が関わってきた政界の裏事情などという、いわゆる世間受けするようなものではない。「彼が忘れまいとしたもの、それは、自分の子供時代なのであった。」。(6-846) しかし、アベローネの筆記が、自分の口述に遅れがちなことから、彼女をお払い箱にしようとしたブラーエ伯は、ある時ささいな過ちに苛立って次のように言う。「この娘にはそれが書けない。そして他の者はそれが読めないだろう。そもそも彼らは、私の言うことを見ることができただろうか。」。(6-847) 続けて彼は、ベルマーレ侯の思い出を「語り」始める。その内容をまとめれば、ベルマーレ侯もやはり「存在する」者であり、侯がヴェニスのことを「語る」時、子供のブラーエはその目にヴェニスを実感することができ、ペルシャのことを「語る」時、その手にペルシャの匂いを嗅ぐことができた、というもの。さらにアベローネは、ブラーエ伯のこの「語り」によってベルマーレ侯の姿を「見る」ことができた、と言われる。つまり、ブラーエ伯のこの「語り」が、アベローネの経験した「本当の語り」であり、その「語り」の内容も、ブラーエ伯が子供の時に経験した「本当の語り」についてのものだ、ということになる。ではこの「本当の語り」とは、どのようなものなのであろうか。ブラーエ伯やベルマーレ侯の「語り」についてまず目に付く特徴は、「語ら」れたものを「見る」ことができる、或いは「嗅ぐ」ことができる、と言われている点だろう。しかしこの問題に直接答えようとするのは、方法的に正しくない。全くの抽象論に終わるか、または単なる比喩として済まされてしまう可能性があるからだ。そこでここでは、「本当の語り」が成立する要件を押さえて見たい。「本当の語り」を成したのは、ベルマーレ侯であり、ブラーエ伯である。この二人は、通常の人間ではない。上述したように、ブラーエ伯は周囲の人間に全く影響されることなく自らの生を生きている。ベルマーレ侯については更に端的に、「彼は存在していた」(6-850)と言われる。すなわち、両者ともに「存在する」者であり、「日常空間」から「抜け出た」者たちなのである。「本当の語り」は「存在者」にして初めて可能なのだ。マルテが「本当の語り」

## 『マルテの手記』における想起空間について

を経験していないのは、かれの時代には「語る」ことのできる「存在者」がない、ということが第一の理由であろう。「語り」の成立する第二の要件として、「語り」の対象が挙げられなければならない。ブラーエ伯の「語り」の対象は、ベルマーレ侯の「思い出」であり、ベルマーレ侯の場合も、「彼が、過去を信じたのは、それが自分の内部にある時だけであった。」(6-848) この過去が、ペルシャやヴェニス「の思い出」なのである。つまり、「語り」の対象は、「語る」者の存在の「血肉」(6-848)となった「思い出」でなければならないのである。「語り」の成立要件としては、この二つを取り上げるだけではまだ十分ではない。最後に「語り」を聞く者が必要になる。ベルマーレ侯の「語り」を聞くのは、子供のブラーエ伯であり、ブラーエ伯の場合は、少女のアベローネである。この両者共、後に「日常性」を抜け出した存在となるという特殊な資質を持ち、かつその感受性の最も鋭敏な時期に「語り」の受容者となっている。ブラーエ伯の「語り」を経験したものがアベローネであったことは偶然ではない。マルテの周囲の人間の中には、「語り」を受容できる者は、マルテを除けば、「日常」を越えることのできる彼女を措いて他にいないのである。「語る」者、「語り」の対象、「語り」を聞く者、この三つの要件が揃ったとき、「本当の語り」の空間が開かれ、「語り」を聞く者は、時と場所を越えて、「語ら」れる対象の匂いを「嗅ぎ」、その姿を「見る」ことが可能となるのである。

「本当の語り」に対するマルテの態度はいかなるものなのであろうか。マルテは、「本当の語り」の復活を目指しているのだろうか。このように問えば、答えは否であらう。「語り」の成立要件だけを考えれば、ブラーエ伯の「語り」を経験したのは、アベローネではなくマルテ本人であることも可能だった筈だ。しかし『手記』においては、そうっていない。マルテにとって「語り」は魅惑的な能力であらう。彼が、直接「語り」を経験したとするなら、その継承者となることが彼の目標となりかねない程に。それ故、マルテにとって「語り」は徹底的に不可能なものとされなければならないのだ。マルテは、人間にとって未知の諸関係の支配する、動的な世界への通路を、「語り」とは別の手段で開かなければならないのである。リルケは、おそらくマルテがたとえ「子供時代の思い出」の中であっても「語り」に接近することを警戒している。「語り」によって、マルテが、孤独の中で命を削りながら続けている試みである「書くこと」への動機が失われかねないことを直感しているからだ。マルテは、硬直した日常世界を抜け出すために孤独を選択した。その彼が、たとえ彼と同じ資質を持つ者に対してであっても、第三者に向けて「語る」ことは許されないのだ。マルテには、自分のために「書くこと」以外のいかなる手段も残されていないのである。

## 註

- (1) 代表的な論文を挙げれば、  
 Fritz Martini: Rainer Maria Rilke. Die Aufzeichnungen des Malte Laurids Brigge, in: Ders., Das Wagnis der Sprache. Interpretation deutscher Prosa von Nietzsche bis Benn, Stuttgart 1954.  
 Ulrich Fülleborn: Form und Sinn der Aufzeichnungen des Malte Laurids Brigge. Rilkes Prosabuch und der neue Roman, in: Untersuchung und Bewahrung, Berlin 1961.
- (2) 拙論, 『マルテ論—書くことの問題—』岐阜聖徳学園大学紀要 第37集 41頁～55頁。
- (3) 第一次世界大戦の混乱の中で多くの資料が散失し、各々の手記がいつ頃成立したかについては不明な点が多い。従ってこれは推測の域をでないが、21までの手記が成立した時期と、それ以降の手記が成立した時期の間にはかなりのブランクがあったのではないか。
- (4) Ernst Feder Hoffmann: Zum dichterischen Verfahren. Rilkes “Aufzeichnungen des Malte Laurids Brigge”, in: Deutsche Vierteljahresschrift 42(1968), H.2(S.202-230).  
 Judith Ryan: Hypothetisches Erzählen. Zur Funktion von Phantasie und Einbildung in Rilkes “Malte Laurids Brigge”, in: Jahrbuch der Deutschen Schillergesellschaft 1971(S.341-374).  
 Huiru Liu: Suche nach Zusammenhang. Rainer Maria Rilkes “Die Aufzeichnungen des Malte Laurids Brigge”, Frankfurt am Main 1994.  
 Bernhard Arnold Kruse: Auf dem extremen Pol der Subjektivität. Zu Rilkes “Aufzeichnungen des Malte Laurids Brigge”, Wiesbaden 1994.  
 等が挙げられる。
- (5) 上記の J. Ryan, H. Liu はこの問題に触れていない。
- (6) Rainer Maria Rilke, Briefe aus Muzot, 1921 bis 1926, hrsg. v. Ruth Sieber-Rilke und Carl Sieber, Leipzig 1935, S. 319.
- (7) 上記, B. Kruse。
- (8) Rainer Maria Rilke, Sämtliche Werke, hers. vom Rilke-Archiv in Zusammenarbeit mit Ruth Sieber-Rilke und besorgt von Ernst Zinn, sieben Bände, Frankfurt 1955-1997.  
 以下引用部は末尾に巻数と頁数を記す。
- (9) Erich Siemauer: Rainer Maria Rilke. Legende und Mythos, Bern 1953, S. 586.
- (10) 1910年3月25日, A. Kippenberg 宛て。  
 Rainer Maria Rilke, Briefe. Erster Band, 1897-1914, hrsg. v. Rilke-Archiv in Weimar, S. 282.
- (11) 上記, J. Ryan。
- (12) 上記, H. Liu。
- (13) もしこの問題を本格的に取り上げるとすれば、『マルテの手記』だけではなく、晩年に至るまでのリルケの作品を追わなければならない。これは本稿の主旨をはずれるが故に避けておきたい。